

杉三小研究発表会 参観者からのご意見、ご質問を受けて、パネリスト・ファシリテーターと懇談しました！

【日時】令和4年2月3日（木）18時～

【方法】オンライン

【参加者】甲斐崎博史（軽井沢風越学園）、山口裕也（済美教育センター）、樋川達郎（済美教育センター） 福田晴一（杉三小GS委員）、戸田憲一（杉三小研究主任）、森賀慎一（杉三小校長） 計6名

【テーマ】参観者の皆様からのご意見・ご質問等に答えよう！

【内容】まずは学校からの一問一答を確認し、その中から特に深堀したいものを出し合い意見交換した。

※学校からの一問一答は、別紙参照

（質問）1年生の学びの構造転換、日々試行錯誤しながら悩んでいる。アドバイスを。…等々

（懇談）・1年生も6年生もあまり変わらない。むしろ低学年の方が、失敗を恐れずどんどん積極的にできる傾向がある。

- ・ 幼児の遊びから始まると考えると、主体性は大きい。
- ・ 「主体」と「従順」を区別して考える。教師の指示したとおり、期待したとおりに積極的に動くのは「従順」と言う方が適切で、これから育成を目指すべきは、「自分なり・自分たちなりに考え、行動を起こす力」としての「主体性」。「教師や大人の想像を超えていく姿」と言い換えてもいい。
- ・ 何かざっくりとした課題があるとき、低学年はいろいろ動き出す。
- ・ 教員は、「底板」になって「天井」を外すべき。「底板」は、「これは全員に確実に習得させる」という意味で、「天井」は、「その子なりの可能性を伸ばす」という意味で捉えるといい。一斉・一律だけで展開していく学習は、「同じ内容を、同じペース、同じ方法」で学べない子は置いてきぼりにし、それでは満足できない子には退屈な時間を過ごさせている側面があることは否めない。「子どもたちの学びたいこと」「先生たちをはじめとする大人が学ばせたいこと」「公に学ばなくてはならないこと」の三つの関係を考えると、できるだけ、子ども一人一人の学びたいことから出発して、残りの2つを、子どもたちが自分や自分たちだけでは解決できない課題や悩みにぶつかった時に、後から追うようにして教えたり学ばせたりしていくことができれば理想的。イメージとしては、「自由度の高いオリエンテーリング」。一定の条件付で問いや課題を自分で作っていい、課題を教員が要因した幾つかの中から選択していい、課題は同一でも解決方法は一人一人に委ねる、など、学年や教科、単元によって、様々な展開があり得る。
- ・ 子どもたちの学びたいことを中心にしながら、残り2つのことも大事なんだと子どもたちに正直に伝えてみる。「どうしたらいい？ どんなふうに学べば、自分の学びたいことと、先生が学んでほしいこと、学ばなければならないことの三つが学べる？」と子供たちに率直に問い掛けて、話し合ってみるといいのでは。それを、時数的にも余裕のある低学年のうちに。人は、自分の「～したい」と他人や社会からの「～してほしい」の間に「自己」を確立していく存在でもある。

（意見）探究的な学習について、総合的な学習の時間だとやりやすいが算数等では難しい。

（懇談）・プログラミングは、教科ではなく裁量の時間でやるとより子どもが乗ってくる。

- ・ 余剰時間を上手に使って、自由に使える学校もある。
- ・ 文科省も「授業時数特例校」や「教育課程特例校」を作ってみたが、あまり手が挙がらないよ

うだ…。

(意見) 構造転換を進めていくには、教育委員会、上司、同僚、働き方改革等、様々なことがかかわってくる。

(懇談)・教員が一人からでもできることは、まだまだたくさんある。

- ・現行制度の可能性を追究し切って、それでもなおできないことがあるなら制度改編、という手順で進んでいかないと、無自覚のうちに(上記した)底板を外すことになってしまうことも。学年学級制があって、学習指導要領があって、教科の区分と時数が決まっていて、教科書があって、指導書があって・・・、と、今の制度だからこそはまっている底板もあることに注意。学びの構造転換は、まずはこうした現行制度内、つまり、教員が、1単位時間の中で、一人でも一人からでもできる学習者主体で個別・多様な探究の可能性を追究するところから始めるのがお勧め。子どもたち一人一人が「みな違う」という前提から出発して、自分なり・自分たちなりに学ぶことで、一人一人にあった底板をはめつつ、それと同時に天井を外してやる取組。ICT、とりわけ一人一台端末環境は、その大きな支えになる。

(質問) 学びの構造転換の最終ゴールは、どこになるのか…。

(懇談)・やはり公立学校の構造転換…。

- ・一人一人のできるところから…。
- ・公教育の構造転換のためには、「①学び」「②学びを支える人」「③学び・教育の場とそこに備わる道具」、これら三つを全ての子どもに・必要とする全ての人に確実に届けるための「④行財政」の4つが必要。まずは、望ましい「学び」の在り方を明らかにして、そのために必要な人や場・道具の在り方を明らかにする。これら三つが明らかになれば、法制度を含めた行財政の望ましい在り方も明らかにできる。実践をしながら研究をし、研究をしながら実践。
- ・「教員一人当たりの児童生徒数」など、「法制度が変わらないとできない」というのもそのとおりと思う一方で、実践しながら「こういう学びの在り方が望ましい。今の35人や40人ではここまでできるが、ここからは困難。だから、法制度の改編が必要」というように両輪で回していかないと、今回の感染症のように大きな外的要因がない場合、なかなか法制度の改編は進まないところがある。学校と行政が協力しながらやっていくことが大事。とりわけ義務標準法の改正などは、教育委員会と文部科学省と学校とが思いや考えを共有することはもはや大前提だし、それはできていると思うので、これからは、自治体レベルでは他部局との、国レベルでは他省との交渉がメインのフェーズに入っているのでは。
- ・上記したような大きな考えをもちつつ、一人一人の教員にできるのは、まず自分の目の前にいる子どもを変えていくことからではないか。
- ・自治体による差もあるが、学びを支える人を増やし、場や道具を整え、できるだけ、学校や地域の主体的・協働的な取組を支える教育委員会や文部科学省の仕組みができてきていることも、確かでは。だから、教員一人一人が学びや自分の指導の仕方を変えることにも、積極的にチャレンジしてほしい。

(質問) 構造転換とは何か、どうしたら構造転換になるのか、教員の中で一致していない。何をどう伝えたらよいか。

(懇談)・参考になる考えはたくさんあるので、それらをもとに自分で考えてほしい。たとえば、杉並区教育委員会では、本校(杉三小)の発表でも引用していたように、基本となる考え方(理論)を示している。こうした基本となる考え方さえ押さえていけば、その実現のためのやり方(方

法)は多様であっていいし、むしろ、そうあることが望ましい。

- ・そもそも、学習者主体を追究すれば、これも発表内容にあったように、「授業は、真の意味で一つとして同じにはならない」。単元の目標や学習内容は同じでも、学級によって展開が異なるということは日常茶飯事。「違って当たり前、でも、基礎となる考え方は共有しておく」というスタンスが大事だし、ひいては、「違った方が面白いし、学年全体や学校全体としての学習効果も高くなる」くらいの考え方も必要。
- ・そして、やり方、実践事例を積み重ねていく中で、自分たちなりの考え方ができてきたら、それを基本に、新たなやり方や実践事例を積み重ねていってほしい。ある程度の量の考え方ややり方が積み重なり、「どこの学校でも、何人かは日常的にやっている」状態くらいにならないと、なかなか進んでいる実感がもてないと思うが、そこまでは、学校も地域も行政も協力しながら辛抱強くやっていく必要がある。近代の学校教育制度が始まって以降、大正や戦後の新教育はもちろん、平成年間の揺り戻しを数えると、史上、四度目となる今回の挑戦。ぜひ、みんなと一緒にやっていきたいと思う。これからの10年をかけて。
- ・教員が一枚岩になっていない方が、むしろ健全でバランスもとれるのでは。「教科として学ばなければならないことからして、その実践、ほんとに大丈夫？」と、慎重かつ冷静に見つめてくれる人もいた方がいい。学びの構造転換「あるある」として多くの人がつまずくのが、「学習者の自己選択の機会を最大化し、自己決定で学びを貫くことで、主体性や活発さは十分に発揮されてきた。しかし、学びの広がりや深まりが十分でない」というもの。この段階になると、改めて、教科の専門性に立ち返る必要性が出てくる。だいたい研究2年目でこの壁にぶつかることが多い。この段階になると、教科専門性の生かし方が、これまでとは違ってくることが実感できるようになる。教えることから、支えることや共に考えることに生かす比重が増えてくる。
- ・標準や正解を求めない方がよい。

(質問) 他の先生方は、どんな気持ちか…。

(懇談)・構造転換の授業は教師の授業力が求められると感じる。

- ・児童主体の学びと教科の身に付けさせる内容(見方・考え方)のバランスが難しい。教科によっても違い、後追いをイメージしながらも先に伝えておくべき場面もあるので。
- ・児童主体の授業は学級経営も含め、そんなに簡単なことではないと感じる。でもそうなるために教師は何をすべきかを考えたのが今回の研究だったので、少しずつ見えてきた気がする。

(質問) 子どもを正しく見取るには何人ぐらいが理想的か…。

(懇談)・仮説的には、24人。「少なく過ぎず多過ぎず」の「適正規模」を考えることが必要。

- ・25人~30人。
- ・4の倍数がよいのでは。(アイランド型の座席を考えると)
- ・3と4の公倍数がよいのでは。

(質問) 学びの構造転換の授業にすると、授業準備や評価に時間や労力がよりかかるのでは…。

- (懇談)・そういう部分があるかもしれないが「子どもの学びが変わった」「教師のやりがい」を考えると、その方がよい。
- ・一人一人違うことをやっているから準備が大変ではなく、その準備も子どもたちがやることである。
 - ・見取りもすべて教師がやらないといけないと考えると大変になるが、学びの責任として子どもが振り返ることが大切。

- ・教師が楽になるのはある。まじめすぎると厳しいが…。子どもたちで進められることも多い。

(質問) 学びの構造転換と通知表の関係は…。

(懇談) ・「評価」と「評定」は分けて考えるべき。

- ・「指導要録」と「通知表」も。
- ・中・高は、現実的に、(都立) 高校・大学の入試がある。そのため、構造転換の取組は、小学校で先行している傾向がある。ただし、中学校の先生たちには、高い教科専門性がある。だから、ひとたび構造転換に挑戦し出すと、小学校と比較してより質の高い学びを生み出す傾向があることも確か。学担という制度を生かして様々な教科や日常生活で挑戦がしやすい小学校と、教科専門性を生かして学びの質をより高度に追究できる中学校。さらには、幼稚園や保育園、こども園が有す、幼児の主体的な遊びを引き出す環境構成という専門性。幼保小連携や小中一貫の取組は、「自分で選び決め(個別)、じっくりと浸り(探究)、共に生き・生かし合い(協同)」という遊びの中に芽生えている学びの方法論的な本質的要素を取り出し、それを、就学以後の教科を中心とした学びに、各教科等の目標や内容の系統性を踏まえつつ、連続的につなげていくためのものでもある。そのことを、改めて意識してほしい。
- ・ただ現状では、小中9年間で受身の学習が染みついている面もあるので、難しい部分もある。経験的には、高学年に行くほど・学年が上がるほど、「先生が決めてくれないと、できない」「『自分なりに』と言われても、分からない」といった傾向があるように思う。